〔翻　訳〕

E. W. バートン・ライト

「柔術と柔道」

〔訳〕小　野　勝　敏

訳者の前書き

E. W. バートン・ライト（Edward William Barton Wright）の「柔術と柔道」なる作品は，1902 年発刊の『ロンドン日本協会雑誌・第 5 巻』[1]に掲載された論文である。この論文は，1901 年 2 月 13 日にロンドンのハノーバー街 20 番地にある「日本協会ホール」における「ロンドン日本協会」の第 49 回例会の席上で，バートン・ライトによってなされた講演である。

まず，作品の筆者兼講演者であり，柔術・柔道の実演者でもあるバートン・ライトおよび，講演の席上で同じ実演をした三人のうちの一人である谷 幸雄の人物像について，少し見てみよう[2]。

バートン・ライトは，1860 年 11 月にスコットランド人の母と英国人の父のもとインドで誕生した。

1880 年代に英国に帰国後，ドイツとフランスで教育を受けた。その後，鉄道員として働いた後，炭鉱技術者として日本を含む世界中を駆け巡った。

日本滞在は，1893 年から 1897 年までの足掛け 5 年間と推察され，仕事の傍ら，神戸にてシンデンフドウ流（Shinden Fudo Ryū）柔術と東京で講道館柔道の少なくとも二つの流派を修行した。

1898 年頃，英国に帰国し，柔術と柔道を組み合わせた彼独自の護身術を生み出し，その名をバーティツ[3](Bartitsu) と名付け，その創始者となった。このバーティツは，創始者バートン (Barton) の前半部・Bart と柔術（Ju-jitsu）の後半部・itsu を組み合わせた合成語である。

1900 年にロンドンのソーホー地区（Soho district）にバーティツ教室（Bartitsu School of Arms and Physical Culture）を創設する。この武道教室で彼は，広範囲にわたる護身術，格闘技（ボクシング，フェンシング，レスリング，サバテ〔savate〕），更に物理学療法まで取り入れた指導をした。1903 年，バーティツ教室は閉鎖された。したがって，彼によるロンドンでの柔術などを含む武道教室の指導期間は，長くて 6 年程度と推察される。この年より 1950 年までの 40 数年間の消息は不明となっている。すなわちこの間，イギリスの柔術・柔道の歴史より，彼の名前を見出すことができない。

再び彼に光が差すのは，1950 年のことである。この年彼は，ロンドン「武道会」の創始者・小泉軍治[4]のインタビューを受け，武道会の集会で紹介された。翌 1951 年没，享年 90 歳であった。貧困のため，キングストンの墓場に墓標なしで埋葬された。2004 年バーティツ会のメンバーが，彼の武道へのパイオニア的功績を称え，記念墓碑の設立に向けての募金プロジェクトが開始された。

次に，谷 幸雄（1881–1950）[5]について見てみよう。

実は，バートン・ライトは，柔術と柔道の技量

が決して高くなかったので，日本の知人に柔道家の英国への派遣を依頼していた。その結果，1900年の終わり頃，谷 幸雄は兄と共にバートン・ライトによって英国に招かれたのである。その後，講演の席上で共に実演をするS. ヤマモト（S. Yamamoto）も招かれた。彼ら三人は，バーティツ教室で柔術・柔道を教える傍ら，音楽ホール（music hall）での公開競技に出場するようになる。しかし，谷の兄とS. ヤマモトは，この興行が柔術を見世物にしているとして，これを潔しとせずに，日本に帰国してしまうのである。

しかし，谷兄弟の弟の幸雄は，帰国せずに英国に在留するのである。その後，日本に帰国した二人の代わりとして，日本よりウエニシ・サダカズ（Sadakazu Uyenishi）が招かれた。谷 幸雄は，彼と二人で，英国にて異種格闘技戦に挑んだ。谷の体格は，身長が153 cm（*Red Rose Ju-Jitsu*には，167 cmとある）で，体重が51 kgの小兵であった。小なる日本人・谷は，大なる英国人を次々と倒し続け，「リトル・タニ」と呼ばれ，当時「アドミラル・トーゴー」[6]と並んで，イギリス人に最も知られる日本人であった，と言われている。

〔注〕

1) Barton Wright, E. W., "Ju-jitsu and Judo", *Transaction of the Japan Society,* London, 1902, v. 5, pp. 261–264.

2) バートン・ライトおよび谷 幸雄の人物像などについては，下記の資料を参照した。
- 岡田 桂「十九世紀末―二十世紀初頭のイギリスにおける柔術ブーム　社会ダーウィニズム，身体文化メディアの隆盛と帝国的身体」『スポーツ人類学研究』第6号，平成17年，27–43頁。
- 2008年12月7日，鹿屋体育大学国際武道シンポジュウムにおけるイギリスのバース大学のマイケル・カラン博士の発表原稿「柔道の国際化と礼法に対する関心――英国を中心に（日本語）」。
- Graham Noble, "The Odyssey of Yukio Tani", *Journal of Alternative Perspectives,* Oct. 2000.
- http://www.budokwai.org/historyvoli.htm#Gunji%20Koizumi20-Early%20Life（「武道会」HP）
- http://en.wikipedia.org/wiki/Edward_William_Barton-Wright

3) このバーティツという言葉は，1903年に発表されたコナン・ドイルの作品『空き家の冒険』の中で，シャーロック・ホームズがバーティツを使って，九死に一生を得たという話の中に，初めて登場する（高橋義雄「名探偵ホームズを救った玉島の不遷流柔術・1」『柔道』，講道館，平成14年9月号，87頁）。

4) 1918年1月26日，ロンドンの「武道会（Budokwai）」は，小泉軍治（1885–1965）により，ドイツ人の婦人服の仕立て屋に設立された。初代師範は，谷 幸雄であった。第一回の公開競技は，同年の5月に開催され，在英日本総領事が出席した。創設初年度の会員は，54名であった。

5) 「今世紀〔20世紀―小野注〕の初頭に，谷先生たちがレスラーやボクサーなどと試合を行い，非常な成功をおさめたことで，柔術や柔道は肉体的な面では魔法に近いというような評判を獲得していました。『柔能く剛を制す』というような言葉も一般に知られるようになりました（トレバー・レゲット『日本武道のこころ』サイマル出版会，1993年，1頁）。」

6) 日露戦争の日本海海戦でロシアのバルチック艦隊を撃破した連合艦隊司令長官の東郷平八郎元帥を指す。

柔術と柔道

演者は，柔道と柔術の長所と短所を話す前に，バーティツ（Bar-titsu）の意味と由来について詳しく説明をしました。バーティツという言葉は，バートン（Barton）という名前と柔術に由来しています。その日本語の柔術（Ju-jitsu）という言葉は，参ったをするまで戦うという意味です。バートンがバーティツという場合は，いろいろなかたちの全くの護身という意味であり，一つのかたちではありません。バーティツは，ボクシングすなわち打撃手段としての拳の使用，攻撃と防御の両方における足の使用，指を打たれることが実際的に不可能となるよう，護身術としてのステッキの

使用から成り立っています。柔道と柔術は，公にされることのない日本のレスリングのスタイルであったが，彼はこれを護身術に応用された秘伝の競技と名付けました。卑怯な攻撃や喧嘩などで，可能な限り傷害をなくすためには，ボクシングは，よく狙いを定めた打撃の危険性やスピードあるいは，攻撃されて危険な身体の部位をよく弁えたものと理解すべきです。もちろん，同じことが足やステッキの使用についても言えます。柔道や柔術は，もともとボクサーや足蹴するものに対する攻撃や防御の第一の手段として考えられたものではなく，接近してからの技術であり，そして接近するためにはボクシングや足蹴をよく知っておくことが絶対に必要です。しかしながら，拳や足蹴の科学的な利用法を理解していない日本人や外国人にとって，柔道や柔術は，信頼できる自己防衛の手段であります。柔道とは，抵抗するのではなく譲ることにより相手の力を利用して投げる科学であり，立位のレスリングとも言えるのです。嘉納師範は，この特別なかたの創設者であり，柔道は，ヨーロッパ，アジアを問わず，最も科学的で優美なレスリングのかたであります。柔道で最も素晴らしいことは，個人の体重と力があまり重要でないことです。他方，ヨーロッパのレスリングにおいては，全くの動物的な力と体重が大きな比重を占めています。このことは，日本では知られていません。男性は一人前の男性として認められたい時，全てに立ち向い，本人がチャンピオンの名に値するかを見せなければなりません。柔術とは，決闘の時の格闘技の科学であり，その大きな規則の一つに相手が負けを認め，手を挙げない限り，負けにならない点が挙げられます。

演者は，最小の動きで手足の骨折や関節を脱臼させたりするいろいろな方法を説明しました。恐ろしいギリシアのレスラーを含む大きなヨーロッパのレスラーの誰もが，その夜に催された二人の演技者の一人である日本の少年チャンピオン〔谷幸雄を指す―小野注〕と対戦しようとはしませんでした。この若者は18歳で，体重は51 kg程度でありました。このことから，彼の提唱する柔術には何か特別なものがあることは明らかです。

かたちというのは，柔術のかたであり，そこでは梃の作用とバランスが最も重要です。バランスを崩すいろいろな方法や手段を説明し，その結果，唯の赤子のように相手の掌中に陥ることを示しました。更に演者は，イギリスではレスリング中に重傷を受け易いが，日本の例では柔術を習っている4,000人の生徒中で一人も怪我人が出ない例を話しました。その日本人がそのように怪我が少ない柔術家である主な理由は，日本には動物的な力と呼ばれる筋肉労働を必要とする力があまり使われず，人力によっていたため，それ故に足の力が強化されたからです。

絞め技に対して首を強化するのも，一つのかたちであります。首を絞められないようにするための首の強化には，約3カ月程度の時間がかかります。

ヤマモト氏と谷氏がいくつかの実例を見せた中で，この二人の代表人物が派手に投げられ，特に谷氏の場合は，ひどい位置から何度も床に投げつけられる例を示範しました。観衆の動揺を静めるために演者は，彼らは慣れていて怪我はしないと保証しました。その後，二人の格闘家により，一連の関節技が紹介され，その二人の実力は伯仲していました。特に谷氏は，自分より大きな相手に負けませんでした。関節技とは，次のように説明できます。関節技とは，相手の腕や脚などを固め，少しでも動こうとすると骨折させたり脱臼させたりするような技であります。次にヤマモト氏は，仰向けに寝かされて，腕を縛られ両端をそれぞれ三人で持った棒を首に渡し，体の上に二人が立ち，そして足を二人の者が抑えました（合計10人になる）。合図と同時に首を絞める意図で，彼らは下方に棒，体，足を抑えつけました。しかし，ヤマモト氏は20秒間でそれを振り解き自由の身となっていました。観衆は，それを唖然として眺めていました。関節技のいくつかの実例も著者自身によって示範されました。この時，助手を勤めたのは，プロシアの第七騎兵隊ダグラス陸軍中尉（Lieutenant Douglas, 7th Prussian Cuirassiers）で，彼は180 cmほどの身長の人物で，観客の中から演者によって舞台に招き上げられました。演

者〔バートン・ライトを指す―小野注〕は，相手よりもずいぶん小さかったが，簡単に相手を放り投げつけ，その場で勝つためのいろいろな実例が示されました。いくつかの質問に答えてバートン・ライト氏は，柔道では体重が関係していないと述べました。二人の柔道教師の体重は，51 kg と 90 kg であります。近いうちに，バートン・ライトはイギリスに柔道と柔術の素晴らしい人物を迎える予定です〔ウエニシ・サダカズを指す―小野注〕。この人物は，57 kg の痩せ型で，筋肉質ではありません。その時 90 kg 近い，そして強いヤマモトでも彼に対しては勝ち目がないことが明らかになるでありましょう。

谷先生は，若輩であるが大変頭脳的で敏捷であります。イギリスの第一線のボクサーたちが首を折られることを恐れて，彼と対戦しませんでした。衣服を身につけない非文明国では，何でもありの取っ組み合いは役に立つが，文明国では，柔道と柔術が護身法として一番適しています。イギリスにおいては，日本人は体型が小さいという考えに慣れているが，相撲取りは，165 kg（26 stone）もあり，ヨーロッパ人と同様に大型なのです。取り抑えるのに六人もの手がかかった酔っ払いの場合でも，関節技で簡単に追い払うことができます。日本の港では，あいつらは小さい悪魔だと叫ぶ大きな体格の船乗りたちが，日本人に水中に投げ込まれています。この柔道は，日本において一般にあるいは無差別に教えられているのではありません。日本に 30 年住んでいる外国人でも，一度も柔道を見たことがない者もいます。バートン・ライトが柔道や柔術の根本について深く知ろうとした時，日本人は疑い深い目で見，イギリスに来て教えるように説得することも，もっと高度な技を学びとろうとすることもできませんでした。柔術の師範たちは，その知識を間違った目的に利用すると厳しく罰せられます。また，彼らは金儲けのためには戦わず，名誉のためには戦います。恐らく，勝者には，安価な小さいカップが与えられる程度でありましょう。

日本の労働者階級は，みんな足が強い。馬を使わずに，ヒトが荷車を引っ張るために，足が発達するのだ。しかしながら，日本人は強肩ではありません。また彼らは，靴を履きません。ある人力車の車夫は，雨の中を 30 マイル〔48 km―小野注〕も走った後も元気でありました。日本政府は柔道や柔術を学ぶように人々に奨励していません。

日本人である嘉納師範は，柔道を無給で教えました。そして，全ての経費は，慈善的な行為で，自身のお金で賄ったのです。嘉納は，日本人が杖術や剣術などからの護身術に如何に巧妙であるかを人々に知ってもらいたいのです。

ロンドン日本協会の会員である G. C. ハイテ氏は述べています。

バートン・ライト氏が，氏の道場では，その知識を自己防衛のためだけに使用し，決して喧嘩に使わない紳士のためのものにしていることと，氏のボクシングとレスリングの仲間の中に，間違った目的でその力を使うものがいないという点において，それが日本人だけではないと言えるのだ，と。

バートン・ライト氏は，大陸によって事情が異なるとも言います。ある国では，一人のヒトを六，七人ものヒトが攻撃することを，何とも思わないのです。トレーニングには，肉体的と同時に精神的な訓練の側面があり，この両面の訓練は，練習なしでは習得できません。ヒトを一目見て，そのヒトが直にそれを理解できるヒトかあるいは最初は方向が違うけれども後に学ぶようになるか見極められるようにならなくてはなりません。

委員長のディオシー氏（ロンドン日本協会の副会長）は，演者への感謝決議を提案した。そして，護身術が使われるべき使われ方をした時や弱者が強者の手から守るためにそれを使う時に，正々堂々の試合ぶりが期待できない国で使われれば，護身術は素晴らしいものになると述べました。

ハイテ氏は，決議に賛成し，満場の拍手をもって決議は採択されました。

訳者の後書き

このバートン・ライトの講演は，かなり以前に下訳が完成していた。しかし，今日までその公表を控えてきた。その理由は，バートン・ライトの素性が明らかでなかったことと，文中のバーティツの意味がよく解らなかったことに起因している。しかし，2008年のスポーツ史学会で，藪 耕太郎氏の「柔道 / 柔術の海外普及に関する一考察――長崎外国人居留地とアメリカ合衆国との繋がりに着目して――」と題する発表の座長をするに際して，氏の引用・参考文献の多くを精読した。この精読の中で，岡田 桂氏の「十九世紀末―二十世紀初頭のイギリスにおける柔術ブーム　社会ダーウィニズム，身体文化メディアの隆盛と帝国的身体」（「訳者の前書き」注2）参照）なる論文を知る機会を得た。そればかりか，氏よりバートン・ライトとバーティツに関する一連の資料の提供をしていただいた。その結果，先に示した2点のことが理解できるようになった。

この翻訳を世に問うことができるのは，上記の両氏のお陰である。心よりの感謝を申し上げる。